麗蝶記

/ 瞳ものがたり

ハアモニィベル

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

目　次

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

麗蝶記

愛し合うふたり

春と詩集

向日葵

デブの肉屋

《瞳ものがたり》

もうひとつのメルヘン

或る架空日記

＊＊＊＊＊

麗蝶記

華やかに彩られた都の、さわがしくにぎわう街に
誰もが欲するような それは鮮やかな模様の珍しいアゲハ蝶が、一匹
ひらひらひらひらと　人々を魅了しながら宙を泳いでいた

蝶は、きまってその貧乏な絵描きの青年の肩に止まっては、
うっとりと、青年がただ無心に描く絵を見ているかのようだった

青年はいつも蝶に気づかず、蝶は青年を見つめながら
自分が蝶であることが悲しかった

やがて、

市場の商人と、雇われた男たちが、
珍しい美しい蝶を捕まえようと、捕虫網を片手に
ドス黒い群れとなって集まってきた

絵描きの青年は、必死に蝶を逃がそうと、
大勢の欲に駆られた集団に突かれ、弾かれ、踏みしだかれて
肩も　背中も　肢も　腰も　頭も、そして利き腕さえも

母親が死んでから一心に描いてきた絵とともに　無惨に踏み砕かれたが
それでも何とか、青年は、その美しい蝶を逃した

蝶は夢中で逃げた

力の限り逃げた、　それが　彼に報いる唯一の手だてだと思って

青年のことを振り返りたい思いに泣きながら

どこまでも　どこまでも　羽が千切れるほど空を駆けた

だが、欲に駆られた男たちの足は　蝶のはばたきよりも
はるかに力強く、容赦ない黒煙を吐き立てながら

蝶に　あと僅かの距離にまで迫っていた

もうだめだ、　もう・・・
蝶は力尽き、殺到する男たちの殺気立った足波が襲い来る地面へ

真っ逆さまに、ふうわりと、
まるで
優雅に舞うかのように、・・・ 落ちたのだ！

その刹那
まるで見たこともない美貌の女が、はばたくように睫毛を跳ね上げて
意識を取り戻した。

そして、自分の上を
山のごとき黒い蝶の大群が　狂ったように飛び回っているさまを眺めながら

「あの蝶（アゲハ）が夢かしら、　わたしが・・蝶の夢・・かしら」

触覚に似たしなやかな黒い眉をほんの少し顰めると
美しい女は、しなやかな白い指先を豊かな胸にあてながら
艶ややかな声で そうつぶやいた

愛し合うふたり

凍りつくほど寒いその国で王子は姫を探しつづけた
冷えきった身体を森の小屋で温めるには、その暖炉はちょうどよかった
暖炉は、本当は姫の居所を知っていた。
が、しかし、ずっと、黙んまりを続けた 。

なぜなら、

　　その中で燃えていたから

王子の凍えた心に火を点けて救う為だと、
暖炉がそう言って
そそのかしたことは、
他に誰も知らない。

ただ、奥から炎が、目の前の王子に向かって切なく吠えるのを 暖炉は、
ゴーゴーパチパチと抑えつけ　ぬくぬくとだまり続けていた。

身体を暖めた王子は、
なにも知らぬまま
見当違いの方角へ旅立っていった。

･･･必ずや 姫を探し出す。と、心に永遠の炎を燃やして

春と詩集

彼女は、毎日散歩することにしていた
おもいがけなく、風の強く吹いたその日
坂道を登り切ったところで
風に語りかけられた樹のように
彼女はざわめいた
そこで傷ついて死んだ小鳥の姿をみて
誰にも看取られない哀しみを最後の詩にした時と同じように。

「何かを落としましたよ
　これです。小さな詩集ですね。
　貴女の詩集ですよ。　」

「え、？
　何ですか、それ？
「どうして、見えるの？
「どうして、在るの？
　『わたしの書いた詩集』・・・、が・・・。」

「すみません、誰にも見せない詩集でしたね
　そっと大切にしまっておいて
　そっと密かに見かえすような
　皆んな　誰もが持っている。だけど、
　あなただけが持っている　」

どうして？どうして・・・？
見えるのですか。

一体、貴方は何者ですか？

見えるのです。
夜、見つめている月のように
　降り立つこともできず、
　近づくこともできぬまま、
ただ遠ざかるだけの
月が、それでも
貴女を見ているように
　私には、
見えるのです。
貴女をいまは
　包みこんだまま、
見ているのです　そして、
こうして、
詩集を返しに来たのです。

でも、
せっかくですけど、わたし、
もう詩を書いてないのです。
あの日から・・・。

「一年前の、
そう、この日でしたね」
貴女がここを通った日、
わたしは見ていたのです。
ここで、
これを、この、『詩集』を、貴女が落として征かれたのを。
だからまた、貴女に逢いにやって来た
こうやって今、

貴女の詩集を届けるために。

「私の詩が見える貴方。
　不思議な方。
　いったい、
　どなた？」

わたしに貴女の詩が見える理由（わけ）
それは、

わたし自身が‥‥‥、

それは、わたしの全身が、《詩》だからです、きっと。

‥‥‥‥‥。

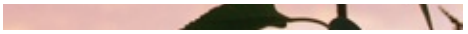
男は名を残して去った。
その男の名は、‥‥《 春 》

B. Johnson

向日葵

風の中を黄色くひまわりは咲くだろう
ひまわりの感情が花びらを広げて
立っているのだ。折れもせずに

忘れられるかもしれない
その日まで。
種を残したきり　そっと
枯れてしまうまで



※

『デブの肉屋』

（――とある肉屋の店先。店のショーウィンドーにはズラリと新鮮な肉が並んでいる。
店主である年配のデブの肉屋が、やって来たひょろ長いお客の青年に話しかける）

「此処に、答えが並んでいる。
見えるだろ。ほら、そこにも、こっちにも」

「いいえ。ぼくは、ただ･･･、
その、なんと言ったらいいか、300ｇでいいんですよ」

「ああ、解ってるよ。いつだってそうなんだよ。
真理というのは 牛肉 なんだ。そして、豚肉 のときもある。そして、鶏肉のときもね。
で、結局は、コロッケだったりもするのさ（ニヤリとして）、そういうもんだ。違うかね？

（青年が何か言いかけると、店主は遮るように――）

･･･去年の夏からなのさ。夜、店から帰る時、
塀の角の向こうに人影が見えるんだ。
ほら、そこの角だよ、さっきアンタが曲がってきた。
その人影は死んだ筈の友人にそっくりでね
それが、いつも帰りに俺を待ってるんだ。

だから、おれは、そこを通らずに、いつも遠回りして帰るのさ。
不気味だと思わないかね？」

（青年が言う）「一体、何の目的でそこに立ってるんでしょう。不気味ですね、それは…
　でもさっきは、誰もいませんでしたよ。今はどうなんです？
あそこの角ですね（眼をやる）。
　で？、今はどうです？　何か立ってるんですか？」

「（そう言われて思い出した肉屋は、ほとほと困惑した顔になり）ああ、それなんだがね。先月から変なんだ。水曜んなってからだ。死んだ友人の代わりに、立っているのがさ･･･（間が開いたので青年が振り返る。その眼に向かって肉屋が言う）牛なんだよ。
あそこの塀の角の処に牛がいるんだ。
それがずっと俺を視てるのさ。大きな牝牛だよ。
ほら（指を指しながら）、今もこっちを覗いてる！」

「（お客は眼を凝らして見るが）うーん、そう言われれば、そんな影のようにも見えますけど。ハッキリしませんね。
でも何となく恨めしそうにユレているような･･･。もっとも、ぼくは眼が悪いので、よくは見えませんが･･････」

「（肉屋はなぜか声を落として、囁くように）

ずっと、俺を視ていて、帰りも俺を待ってるのさ。
毎日ずっと俺のことを観ていて、俺の帰りを待っているんだ。
仕方がないから、俺は、あいつにジュディという名を付けてやった。
暗闇のジュディさ。長いまつ毛のね

ほら、双眼鏡がある。これであの角をよく視てみろ（と青年に双眼鏡を差し出す）」

「（怪訝な顔で、しぶしぶ双眼鏡を眼にあてながら）どれどれ。
　『アッ、』　あれは、、確かに･･･、し、しかし･･･。どうして？、」

「見えただろう。真理が、アンタにも」

「ええ、確かに。今、一瞬ですが、はっきり見えましたよ」

「そうだろう、アンタにも見えたろうジュディが」

「ええ。ジュディでした。それじゃ
　300ｇください。
　ジュディを」

「・・・？！。えっ、何？ 何だって？
　すまない、もう一度言ってくれないか、
　何だって？」

「ジュディですよ。ジュディを300g 下さい。」

-END-

※

（本作品は、映画のタイトルと同じ題名で作品を書く、という企画の下で書いたもの。内容は同タイトルの映画とは無関係です）

＊　＊　＊　＊

わたしに話しかけて／《瞳》ものがたり

キミィという名前の可愛い女の子がいた。
綺麗な瞳が自慢で、視力も良く、
そして、恋をしていた

だが、問題があった
キミィは、躰が、丸いのだ
太っているわけではない
ただ、あまりにも、球いのだ。

じつは、
彼女は眼玉なのである。

見ることはできたから、
だから、イケメンの彼に恋したのだ

ところが、
話すことができないのだった。

キミィは、眼玉なのだから。
とうぜん口唇がなかった。

それじゃ、キスだってできない。

キミィは、祈った。
毎日、星に。
星を見ることはできたから。

すると
どうだろう。

何と！驚いたことに！
眼玉の彼女に、真赤なクチビルが！

「わたしに話かけて、ねえ」
「ねえ、わたしに話かけて、さあ」

彼女は愛おしい彼に、ようやく
告げることができた！
何度も
何度も･･･

彼は笑顔で、
キミィに話かけた。何を？

眩しい笑顔に白い歯で、彼は、何を？

《なにを言ってるのかしら？》

見ることも、話すことも、できる

眼玉のキミィ。なのに、ところが‥‥‥‥‥？！
彼の言葉を聞くための
耳が無いのだった！

目と口はあるから訴えることはできた。
でも、耳が無かった。

でも、キミィは眼玉だから、
（だから）
（だから）
泣くことはできた。
せっかく手に入れた唇も泣いた。大声で！

涙の堕ちたところには、
とても可愛くて
切ないほど黄色い
　ステルンベルギアの花が
小さく そっと 咲いた。

＊＊

キミィはその花を摘むと
愛おしく頬を寄せ　そしてまた泣いた。

花に頬ずりしては泣き

また頬ずりしては泣いた
泣いても泣いても
花を見ると涙が止まらず
そのたびに
悲しい自分の声が響いた……
?!
髪飾りのような黄色の花びらは、いつしか
彼女の耳になっていたから。
その耳になった花から
彼女の嗚咽が、彼女にも聞こえていた。

「ああっ！聞こえる、聞こえるわ！」

その嬉しそうな悦びの声が
もちろん彼女にも、そして
彼女を包んだ夜空いっぱいの星たちにも
輝くほどよく聞こえた。

もうひとつのメルヘン

街を歩くと背中ばかりだという。
マッチ売りの少女が死んでいる通りを過ぎ、
崩壊したまま放置された幸福の王子の像の前で待ち合わせした、
”みにくいアヒルの子” のような お前が愛しい。

通りは狼とデートして楽しそうな赤ずきんばかり
そいつはオオカミだぞ！と叫ぶこっちの狼少年の声も虚しく
母親の忠告も、頭巾の中に隠れた耳には届かないようだ。
路地で迷子のヘンゼルとグレーテルに誰かがお菓子の家を教えていたゾ

家で寝息をたてる眠り姫は　とくに朝が眠いらしい
朝食も弁当も作らず、家に帰っても眠ったままだ
起そうとして接吻したとき、少し開いた玉手箱が目に入った
一本足のブリキの兵隊と踊り子のような俺たちだったのに

人魚姫が王子様を刺して逃走中だというニュース
死後３日が経過し、犯人の足跡は（当然だが）ないという
手配写真が、どこか初恋の女に似ているのが
切なくてたまらない

あんまり悲惨すぎる世界に　どうやら
夢らしいなと察知し、眼を開けようとした、その時、

突然こどもが通りへ飛び出し、
俺を指差しながら、「あっ裸だ！裸だ！」と叫んだ
オイオイ、坊や、誤解しないでくれよ　これは当然
北風と太陽のせいなんだ　ﾍｯｸｼｮﾝ!！

以上 Fiction !

The END.

『或る架空日記』（抄）

〇月 □日

　或夜、とつぜん知らない人の書斎に案内され、その人が生前書き残したものを読んでいる夢をみた。その夢は、何と言うか、あまりにもリアルだったので、正直いまもまだ、その夢から醒めずにいるような気すら私はしている。書斎の机の一番大きな抽き出しの中に、一冊の黒革の日記帳だけがひっそりと重く入れられているのを偶然見つけてしまい、ともかくも、私はまずそれから読み始めた‥‥‥。恋を知らずに死んだと言うその人は、どうやら、毎日誰かからの手紙をずっと待っていたようだった。そこには、郵便箱の記述が何度も何度も出てくるのだ‥‥‥

〇月 □日

　今日も、ポストを開けてみた。すると、今日はアルマジロトカゲが入っていた。何なのだろうこれは。悪戯(たち)だろうか‥‥。普通の人であれば驚くに違いない。でも、私はものに動じない性質だから、「コンニチハ、元気？」と挨拶してみた。しかし、其奴(そいつ)は、自分の尻尾を咥えたまま、憤怒の形相で動かない。コレはこれで、誰か、かなり苦悩している人の手紙なのであろう、きっと。

〇月 □日

　　朝、ベッドの中でいつまでも起きられず、顔を洗ったときには、時計は８時を過ぎていたが、昨夜、なにか夢を見たような気がして、しきりに思い出してみたが、いっこうに思い出せなかった。私は、見た夢のことをまったく覚えていられない性質(たち)なのだ。ただ、何となくだが、骨相学についてアリストテレスと議論して彼を号泣させてしまったような気もする。

（――筆者註）

　　◇ 骨相学というのは、19世紀、西洋で大流行した、言わば、頭蓋骨で人間を測る占いである。なので世紀後半には、科学から排除された。だが「能力」論の系譜を古代ギリシアから辿ったりする場合に興味深い。

　　◇ 「此の時、アリストレスが骨相学を擁護したので、私が風呂敷からデカルトの頭蓋骨を差し出して見せると、彼は突然号泣した」と、この時の記憶を後日の日記に書いているが、「それは多分、眠る前に『デカルトの骨 死後の伝記』という本を読んだせいに違いない」とも小さく記されている。

〇月 □日

休日。本屋をハシゴして歩く。古書店も見て歩く。本から本へと飛び歩く蝶のようで、自分が荘子だったか蝴蝶だったか分からなくなるが、結局、小知など捨ててしまえというわけで、上質な蜜を、二、三冊買って帰るだけである。ところが帰り道、なぜか、《統計によると世界では、年間に航空機事故で死亡する人よりも驢馬に殺される人の数のが多い》といった変なTriviaまでが、花粉団子の如く脳に沢山こびり着いてしまっているのが、まったくもって無用の用だ。

〇月 □日

『日記論』という大著を書き上げたので、ぜひ読みに来い、と言われたので、ああ『土佐日記』とか『更級日記』とかその辺の研究ですかと訊くと、全然違うもっと面白いものだと言うので出かけてみた。しかし、考えたら私は相手の住所を知らなかった。そこで、行く宛てもなくぶらぶらと暫く歩いていると、庭で日記を燃やしている和服の女性を見つけた。「墓を暴かれないように、闇から闇へ」と女性は微笑みを見せながら、歌うように、頁を破り取っては、火の中に投じていた。私は一瞬でその頁を読んで、美しい名文に舌を巻いた。私はそれを強く惜しんだが、最後は、その女性自身が燃えてしまった。

麗蝶記／瞳ものがたり

http://p.booklog.jp/book/100677

著者：ハァモニィベル
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/harmonybell/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/100677

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/100677

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ